
僕 / 命 (いのちぶんのぼく)

ナギシュウタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕ノ命

いのちがいのほく

【Nコード】

N0749BA

【作者名】

ナギシュウタ

【あらすじ】

命だけがある物語。

何かが変わる事を期待しながら、何も変わらないだろうと誰もが思い込んでいた新年。
全てが、崩れていく。

第1話：初夢

世界は狂った。

世界：1

人間の命：約700000000000

全生命：

命すらも数えられてしまう時代。

この世はある種、作られている。理屈と法則によって作られている。それによって、人間は束縛と束縛の中の自由を手に入れた。それはやはりどこかに不安を持っていたが、野生の動物達の生活と比べると、それは確実に平和な世界であった。人間と物質が世界を駆け巡り、絶妙なバランスを保っていた。しかし、人間はそれに安心しきってしまっていた。

その法則が崩れた瞬間、世界が崩れる事も忘れて。

そしてその法則は、たった今崩れた。

そう、たった今。

嘘だと思ukai? そりゃあ、キミの周りにはまだ変化は起きていない可能性の方が高いだろう。全世界が同時に変化の波に呑まれるわけがない。波という物は、発生源から順番に全てを呑み込んでいくのだ。音もなく、少しずつ勢いを増しながら、人間の言う非現実が、この世を蝕んでいく。

ほら、お前のすぐ後ろにも……。

「つていう夢を見たんだけどさ……」

「夢オチかよ」

「別にいいじゃん。オチを重視して話をしてたわけじゃないし」

「あつそ……」

「いやな、重要なのはさ、今日元旦じゃん」

「あー、初夢って事？」

「そそ。結構良く分からない夢だったんだよ」

「そりゃあお前がいつつも妄想してるからだろ」

初詣の帰り道、厚着のジャンパーを着た2人組が横並びで歩く。人混みから離れ、やっと澄んだ空気を満喫できる下り坂。田舎道、道の両脇には草と霜が見える。

右側の男が立ち止り、後ろを振り返った。

「おい、何後ろ見てんだよ？」

「さつきさ、夢の話したじゃん。その時、目が覚める前に最後に言われた言葉がな」

ほら、お前のすぐ後ろにも……。

「んなの夢だつて言ってるじゃんかよ」

「いや、けどさ、やけにリアリティがあったっていうか、普通の夢に見えなかったん……」

「お前……そんなに夢とかに敏感な奴だったか……？」

返事はない。

「おい」

返事はない。

左側の男も、振り返った。

「お……」

ごめん。

何かが落ちた音。そして血しぶき。

首のない人間が、仁王立ちしている。それはついさっきまで会話していたはずのあの、あの。

そしてその後ろ、坂の上。

狼……じゃない。

狼としては体格が大きすぎた。それは既にトラすら超え、高さは2.5mほどあるように見えた。そして足は、6本。灰色の身体。柔らかな毛並み。見た事のない、恐らくこの世界で誰も見た事のない、生き物。

首を無くした死体が崩れ落ちる前に、男は駆け出した。

空気が一気に寒気を帯びたのを、男は感じる。空が暗くなったと思ったが、それは雲ではなくその巨大な生き物の作り出した影だった。

跳躍していた。

男は、凍えるような寒さと押しつぶされる感覚と、死を感じた。

波乱と混沌を孕んだこの年を作ったのは、一体誰なのだろう。崩壊の足音を聴いた者は誰もいなかった。

この物語には何も無い。法則も理屈も正義も悪も、そして主人公も。

ただ、命だけがある。

世界：1

人間の命：約7000000000 - 2 || 約7000000000

全生命： + ||

第2話：逆鱗

「いや……いや、いや、来ないでっ！」
逃げる。相樂麻耶さがらまやは逃げ続ける。自らが16年生まれ育った町の中を逃げ続ける。

麻耶の家族は家にはいなかった。年が明けたばかり、家族はみな旅行に行っていた。しかし麻耶はその旅行に同行する事を拒否した。麻耶は反抗期だった。家族と一緒に行動する事を恥ずかしいと思っていた。だから、年末年始はずっと友達の家で遊んでいた。楽しかった。先の事など考えずに、ただただその日を楽しむ、そんな刹那的な生き方がたまらなく好きだった。面倒くさい思いやりなどなくていいのだ。楽しくないわけがなかった。

その友達は今もうこの世にいない。
たった、たった数十分前までは一緒にいた。生きていた。一緒に笑っていた。なのに、今はもういない。死んだのだ。殺されたのだ。竜に、殺されたのだ。

「こんなの、誰が、誰が信じるのよ……」
逃げる。振り返っても何も追いかけてこない。それでも足を止められない。麻耶の背筋を汗が流れる。真冬の凍える空気の中、脂汗が流れる。

未だに信じられない。麻耶はまだ自分の目を疑っている。あの竜、青い肌白い蛇腹の姿、すらりとした手足に爪、背中には巨大な翼膜を張った翼を形作る骨格。しかし、あれはCGなんかではない。現実だ。

麻耶の頬に、小さな切り傷のような物があった。それは、竜の爪が麻耶を掠めた事実を示す物であり、同時にその竜の存在を証明する物でもあった。少しだけ流れている血は、気づくと涙と混ざって滲んでいる。麻耶は泣いていた。恐ろしくて、心細くて。

結局、私は弱い生き物なのだろうか。1人じゃ何もできない、無

能な生き物なのだろうか。

「ひっ」

その時、麻耶は見た。見えた。見てしまった。

竜。2階建ての一軒家よりも大きな身体。圧倒的な存在感。それが、今自らが駆けていた道の先、脇に立ち並ぶ家の合間から姿を現した。麻耶は慌ててブレーキをかけ、しかし踏みとどまれずにその場で勢いよく転倒してしまった。その音に、竜は麻耶の存在を認知した。家に手をかけ、コンクリートを発泡スチロールのようにぼろりと崩しながら麻耶に近づいていく。

麻耶は立てない。全身が鳥肌を立てている。寒さではない。恐怖。

絶望。

竜は麻耶の目前に来た。長い口吻をした顔を、麻耶の目の前にすい、と近づける。穏やかな息遣いが聞こえる。夢なのか、夢じゃないのか。確認はできないが、この竜は命を宿している事は、事実だった。麻耶は動けない。動いた瞬間に殺されてしまいそんな予感を感じていた。

その竜はすらりとした腕を自らの顎の下にやり、何かをむしり取った。竜はそれをつかんだまま、麻耶の顔に近づける。鱗だ。

突き抜ける青空に光の粒が混じったような、そんな鱗。

それを、竜は麻耶の口に押し込む。

悲鳴をあげようとした麻耶は、しかしその竜に押し込まれる鱗のせいで声を出す事ができない。拒否しようとするが、竜はもう片方の手で麻耶の顎を掴み、無理やりその口を開かせる。

息ができない。麻耶は竜に半ばのしかかられながら、もがき苦しむ。

麻耶は意識を一瞬なくしていたようだった。我に返ると、その竜の姿はもう見えなかった。荒い咳を何度もする。肩を上下に動かす。

て息をし、

視界が真っ白になった。

脳髓の中心から末端神経へ、痺れが流れていく。痛みも感覚も、全て失われていく。無意識に身体が痙攣しているのをうつすら感じる。そして、感じる。自らの身体が形を変えていくのを。

麻耶の服が、ばらばらになる。爪が伸び、尻尾は生え、体格は変容し、筋肉は締まり、背中には翼が生じる。

あつという間、あつという間だ。意識がぼやけていたせいもあつたのか、麻耶にはほんのわずかの時間しか経ってないように感じた。竜だ。

この身体は、あの竜と同じだ。

思考が働かない。この現実を受け入れられない。ただ、呆然と、そして身体をがたがた震わせる。麻耶は泣いた。

竜の鳴き声が出た。空気を揺らし、空間を揺さぶる声。竜と化した麻耶は頭を抱えてうずくまった。

そこで、身体の次なる異変を感じた。少しずつ……身体が小さくなっている？

最初は明らかに体格が人間の時より二回りはあつたはずだったが、今では人間の時とほとんど変わらない体格にまで小さくなっていた。麻耶はほとんど思考が鈍くなるのを感じた。考える事が煩わしくなってくる、もう意識など不必要に感じる。全てがどうでも良くなってくる。

何分経っただろう。

そこにいるのは人間の子供ほどのサイズをした小さな竜の仔。きよるきよると好奇心の瞳を辺りに振りまいている。嬉しそうに尻尾と翼をゆらすその竜の仔。

既に、人間の面影はない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0749ba/>

僕 / 命（いのちぶんのぼく）

2012年1月2日01時45分発行